

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32618
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2019～2023
課題番号：19K00455
研究課題名(和文) アメリカ女性作家にみる性差と身体の表象の系譜 ケイト・ショパンの作品を中心に

研究課題名(英文) Representing Sexual Difference and Body: Kate Chopin and Women

研究代表者
佐々木 真理 (SASAKI, MARI)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：30297436
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカ合衆国の社会と文化に大きな影響を与えた優生学に基づく思想や言説が、女性作家の作品における女性の身体の表象にどのように作用したのかを考証することで、性差と身体の問題がどのように言説化され、どのように女性作家の作品と交差したのか、その過程と余波を捉え直した。

具体的には、新たな女性象が19世紀末からアメリカの雑誌等のメディアに頻出するようになったが、その身体が優生学思想に基づく白人中心主義的なものであること、そして、そのような女性の身体の表象が、建国時代から20世紀にいたる女性作家の作品における一つの流れを形成していたことを明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカにおける女性作家たちの作品に焦点を絞り、新たな女性像の表出を試みた女性作家の作品が、同時代の社会において趨勢を占めた優生学思想と切り結んだ関係を精緻に分析することで、時代を越えてアメリカ女性文学を捉え直す通時的な視点を獲得した。また、それによって、現在まで残る女性作家たちの問いの発端にあるものをとらえ、女性文学の理解と分析に関する新たな枠組を提供した。

研究成果の概要(英文)： My research explores the impact of eugenics on the representation of women's bodies in the works of women writers from the late 18th century to the early 20th century in the United States. By examining how gender differences and bodily issues were articulated, I delve into the intersection between these themes and the literary output of women writers during that period.

I conclude that a new representation of women in media during the late 19th century emphasized a healthy, white, middle-class female body, so that the strong ideological link between eugenics and the idealized female image persisted from the late 18th century to the 20th century, impacting various women writers who advocated for female liberation.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：女性作家 フェミニズム 優生学思想

1. 研究開始当初の背景

アメリカ合衆国における女性作家に関する研究は、1970年代より活発なものとなり、現在では多くの成果を挙げている。様々な批評理論と接続することで、多様な視点からの分析を可能とし、また、女性運動などの実際の社会からの要請に回答しつつ、社会へ向けての学術成果の発信を重ねることで、現在は、広くアメリカ文学を理解する上での重要な研究分野として位置づけられている。女性作家の研究が始まった1970年代当初から90年代までは、研究者たちの主たる目的は、失われた女性作家の再評価であった。Nina Baymの*Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820-70* (1993)を始めとする研究によって、それまで歴史の中に埋もれてきた女性作家に再び光が当たることとなった。1990年代を過ぎ、21世紀に入ると、その流れは発掘された女性作家たちの再々評価、すなわち、彼女たちの作品を社会的・歴史的文脈の中におき改めて問い直すことで、作品に内包される当時の問題や限界も正しく認識した上での作品の分析が行われるようになり、言うまでもなく、これはアメリカ文学研究の新たな方向性を策定する上での重要な枠組のひとつとなった。注目すべきは、この研究の流れが、21世紀の現在、第三次女性運動、そして2017年よりアメリカにとどまらず広く世界を揺り動かすこととなった#MeToo運動の余波を受け、さらなる発展と転換を迫られているということである。

本研究における主な研究対象であるKate Chopin(ケイト・ショパン、1850-1904)は、まさに1970年代以降に活発化した女性文学研究において再評価されることとなった女性作家の代表的な一人である。当時の女性らしさの規範を批判し新たな女性の生き方を模索したショパンの作品は、それまでにない方法で女性の身体とセクシュアリティを描き、同時代の批評家たちからは厳しい非難を受けることとなり、そのテーマの持つ意義が正当に評価されることなく、いわゆるアメリカ文学史においては19世紀後半にアメリカ南部を舞台とする地方色豊かな小品を得意とする作家としてのみ長らく扱われてきた。ショパンの再評価が進んだ1970年代から80年代にかけては、まさに埋もれてきた女性作家としてその存在自体に注目が集まり、女性たちの抑圧された欲望や沈黙を強いられた自己を大胆に作品で描いたとして、その作品のテーマや姿勢が高く評価されることとなった。しかしながら1990年代に入ると、ショパンの思想を単独で論じるのではなく、ショパンが生きた時代とアメリカ南部の複雑な社会的背景を踏まえた上で、ショパンの作品に含まれる人種的・民族的な偏見の問題についても考察が進むようになった。ショパンに関する研究書は21世紀に入ってからも続々と発表されているが、とりわけ、ショパンの提示した特に女性の性差化された身体とセクシュアリティの問題が現在なお問われ続け、現代の女性作家たちによっても共有されているということは、ショパンによって可視化された問いがいまだ解決されていないということを示している。それはつまり、身体の問題が、アメリカの女性作家を通時的に考察するにあたって、大きな鍵となる視点であるということ、そしてショパンにおけるその問いを改めて検証することは、アメリカ女性作家の包括的な研究の枠組を策定する大きな一歩となるということを示すものといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国の社会と文化に大きな影響を与えた優生学に基づく思想や言説が、女性作家、特にケイト・ショパンの作品における女性の身体の表象にどのように作用したのかについて考証することで、当時の性差と身体に関する規範と、それに対する女性作家の反応と戦略を明らかなものとするところである。そこから、アメリカ社会にあって性差と身体の問題がどのように言説化され、どのように女性作家の作品と交差したのか、その過程と余波を分析することで、アメリカ女性文学の系譜を捉える通時的な視点を提示することを最終的な目的とする。

3．研究の方法

ハナ・ウェブスター・フォスター、ケイト・ショパン、シャーロット・パーキンズ・ギルマン、ジーン・ウェブスターの長編作品において、女性の身体に刻印された性差と規範が、当時の性差と身体をめぐる言説、特に優生学に基づいた言説にどのように影響を受けているのか、また、応答しているのかについて分析と考察を行った。さらには、19 世紀後半からアメリカの雑誌や新聞といったメディアにおいて頻出するようになった「ギブソン・ガール」と呼ばれる女性の姿と優生学思想との関連をたどることで、新しい女性像に内包された、帝国主義と白人優越主義の思想を明らかとし、女性解放運動にかかわった女性作家たちの作品における新しい女性像にもその思想が影響を与えた過程を論証した。

4．研究成果

本研究では、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国の社会と文化に大きな影響を与えた優生学に基づく思想や言説が、女性作家の作品における女性の身体の表象にどのように作用したのかについて考証することで、性差と身体の問題がどのように言説化され、どのように女性作家の作品と交差したのか、その過程と余波を捉え直した。

具体的には、18 世紀に作品を発表したハナ・ウェブスター・フォスターから 19 世紀後半のケイト・ショパン、20 世紀前半に活躍したシャーロット・パーキンズ・ギルマン、ジーン・ウェブスターまでを取り上げ、その作品における女性の表象の分析を行った。いわゆるギブソン・ガールと呼ばれる、新たな女性たちの表象が 19 世紀末からアメリカの雑誌等のメディアに頻出するようになったことに着目し、その身体が優生学思想に基づく白人中心主義的なものであること、健全な子供を産み育てる健全な身体がその表象を通して要請されている点を明らかとした。さらには、そのような女性の身体の表象が、フォスターの作品にみられるように、建国時代のアメリカにおいて支配的であった、共和国の母という理念と共鳴することで、優生学思想と女性像をつなぐ下地が過去から用意されていた点にも注目した。その傾向は、時代を経て、ショパン、ギルマン、ウェブスターの時代になっても作品の女性像を規定し続けていることから、女性の身体に要請される健全さと母であるべきというイデオロギーが、女性解放を訴えた女性作家の作品であっても、その枠組みや女性像を左右していたことがわかった。そのうえで、規範的な身体の獲得に対する社会からの要請に女性作家たちが自らを解き放つには、20 世紀後半、第二次女性運動以降の作家たちを待たなければならなかったことを指摘し、次の研究への展望を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐々木真理	4. 巻 76
2. 論文標題 アメリカ女性作家と優生学思想 ハナ・ウェプスター・フォスターからジーン・ウェプスターまで	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 実践英文学	6. 最初と最後の頁 27-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/0002000084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------